

令和6年度山形県介護生産性向上総合支援センター事業

## 令和6年度 伴走支援実施施設成果報告

施設名： 小規模特別養護老人ホーム ライフケア黒森

所在地： 山形県酒田市

定員： 29名



# 取組の目的

## ① 伴走支援に応募した理由

介護現場へICT・介護ロボットを導入し業務の効率化を図り、職員の負担軽減や働きやすい職場づくりを推進することで介護人材の定着、介護サービスの質の向上を促進するためICT・介護ロボット導入を推進していきたいと考えた。

## ② 事業所の抱える課題

長期的な課題として、介護人材の不足による介護職員の負担増がる。小規模特別養護老人ホームにおいては身体介護中重度の方が入所されており看取り期にある方も急な体調変化、筋力低下による転倒事故も増えている。これらの問題点から、ご利用者の生活の安全を守り、職員の精神的不安や身体的な負担軽減を図っていきたいと考える。

## ③ 業務改善・効率化の目的

介護現場において、ICT・介護ロボットを活用することは、職員の業務負担の軽減に繋がり、効果的な機器の使用は介護の質を高め、ご利用者の生活をより良いものにするのが期待される。介護現場において、ICT機器の利用は、職員が行うマンパワーによる直接的なケアを手助けするもので、ケアの補完であり今後も私達は、職員のケアの質の向上に努めいくことを目的とする。

# 生産性向上取組活動①【委員会】

- ① 委員会の立上げ時期、メンバー(役職)、人数、開催回数  
委員会は 令和6年5月1日に発足し、各事業所の管理者、看護師、現場職員(通所・入所→全12名)の構成メンバーで年4回開催とした。
- ② 具体的な委員会での活動内容  
委員会は、生産性向上の実施状況を確認し、ケアを行う職員等の意見を尊重しつつ、必要に応じて利用者の安全並びに介護サービスの質の確保及び職員の負担軽減を図る場とした。

## 1.利用者の安全及びケアの質の確保について

- 該当事業所ごと昨年度法人内で策定した介護へのロボッ・ICT機器導入指針に基づき対応していき、モニタリングやカンファンスを実施する。
- ・ 介護事故等に関して内容や原因を分析し事故報告書を作成し再発防止に努める。
  - ・ 会議内で各事業所の事故内容状況を定期的に確認する。
  - ・ 各事業所の事故の件数、原因分析や防止策を検証する。

## 2. 従業員の負担の軽減及び勤務状況への配慮

- ・ 実際に勤務する職員に対してアンケート調査やヒヤリング等を行い、介護機器等の導入後における次の①から③までの内容を確認し適切な人員配置や処遇の改善の検討等を実施
  - ① ストレスや体調不安等、職員の心身の負担の増加の有無 ⇒ アンケートの実施
  - ② 職員の負担が過度に増えている時間帯の有無 ⇒ タイムスタディ実施
  - ③ 休憩時間及び時間外勤務等の状況 ⇒ 時間外の検証

## 3. 介護機器の定期的な点検

- ① 日々の業務中で、あらかじめ時間を定めて介護機器の不具合がないことを確認するなどの不具合のチェックを行う仕組みを設ける。
  - ⇒ 機器のチェック表を用いてチェックする仕組みづくり
- ② 使用する介護機器の開発メーカー等と連携し、定期的に点検を行う。
  - ⇒ メーカーの担当者に確認し、点検する頻度や点検箇所を明確にした

## 4. 職員に対する研修

- ・ 介護機器の使用方法をの講習やヒヤリ・ハット事例等の周知、その事例通じた再発防止策の実習等を含む職員研修を定期的に行う。
- ・ 加算(Ⅰ)を算定するにあたっては、職員間の適切な役割分担(いわゆる介護助手の活用等を含む)による業務の効率化等図るために必要な職員研修等を定期的実施する。

⇒ 計画的に開催

## 生産性向上取組活動②【実行計画】

- ① 成果目標を「業務の効率化及びケアの質の確保並びに職員の負担軽減」とした。
- ② 実行計画として、委員会の立ち上げ、委員会活動の計画、業務の効率化の検討、ICT・介護ロボット機器の選定、ICT・介護ロボット導入指針作成、職員へICT・介護ロボット導入について説明、ICT・介護ロボット導入の順で行うことにした。
- ③ 取組方法は委員会で役割を決定する。
- ④ 実行前に行った準備として、ICT・介護ロボット導入指針作成し、導入について職員へ説明したのち、家族説明を行い同意を得ることとした。

# 生産性向上取組活動③【実行】

## ① 活動実績

伴走支援後に事業所が導入した機器 ⇒ 見守り機器(安心ひつじ)、排泄支援(Dfree)、トランシーバー

## ② 取組活動で苦労したこと、失敗例など

移乗支援機器については、購入時、効果的だと考え導入しましたが、導入後装着に手間が掛かり、その解決策を工夫しましたが結果使いこなせなかった。しかしその使いこなせるまでの検討段階でのプロセスが職員のチーム力向上に繋がった。

## ③ 工夫したこと

上記の失敗例を法人側は、寛容に受け止めてくださり、私たちは次の新たな課題へと前向きに進めることができた。その後は、現場の声を聴き、現在のICT・介護ロボットへの導入に繋がっている。

当法人は、20代から50代の職員がおり、その年代の強み、弱みをお互いがフォローし合う環境が整っておりICT・介護ロボット導入もその環境下でスムーズに現場で受け入れられている。その分野に長けている、適材適所に職員を配置しながら進めている。

## 《参考》

### 介護へのロボット・ICT機器導入指針

#### I. 介護ロボットやICT機器導入の目的

介護現場において、ICT機器を活用することは、職員の業務負担の軽減に繋がります。また、効果的な機器の使用は、介護の質を高め、ご利用者の生活をより良いものにすることが期待できます。

#### II. 導入するにあたっての基本的な考え方

ICT機器を使用することは、職員の業務負担軽減や介護の質を高めるという側面があるものの、プライバシーや尊厳への配慮が見過ごされる場合があります。導入にあたっては、この考え方に照らし、その可否を判断していきます。

#### III. 機器使用時の視点と尊厳の保持

##### (1) 機器使用時の視点

ICT機器の利用は、職員が行うマンパワーによる、直接的なケアを手助けするものです。

ICT機器は、ケアの補完であり、職員のケアの質の向上には、常に取り組まなければなりません。

(2) ご利用者に対するプライバシーや尊厳の保持行動を把握するためのICT機器を使用する際は、ご本人、ご家族へ丁寧な説明と同意が必要です。これらの機器は、職員の対応次第で行動を制限してしまうことになり得るため、職員の共通理解が必要です。適正に機器を使用することで、「その人らしい生活が送れる」を念頭に置き対応していかなければなりません。

#### 定期的なカンファレンスの実施について

ICT機器を正しく使用しているか、定期的カンファレンスを開催します。具体的には、ご利用者の意向に変化はないか、尊厳を傷つけることに繋がっていないか、職員が目的以外で使用していないかについて、ケアプランに位置づけし、毎月評価を行い定期的カンファレンスを開催し検証していきます。

# 生産性向上取組活動④ 【成果】

- ① 成果指標
  - ・ タイムスタディ
- ② 効果検証の方法
  - ・ 職員数、時間外労働
- ③ 経営・管理職層の評価、取組活動に参加した職員の声など
  - ・ 令和元年職員数は全体184人⇒令和6年175人で運営できている背景には、数年かけてICT・介護ロボットを導入し業務の効率化を図り、働きやすい環境づくりに努めた。

	開所当初 平成26年度	令和元年度	令和6年度
職員数	17人	15人	13人
時間外平均値	6.9時間	4.2時間	2.9時間



STタイムスタディ A勤(いちょう) 調査結果

	項目		7:30	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	16:00	合計	増減
			8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	16:30			
直接介護	1. 移動・移乗	12月	15	5		10		10	5	10	10	65	↓
		2月	8	5		8		8	5	8	8	50	
	2. 排泄介助 支援	12月		15	15	10		15	15	15	15	100	↓
		2月		10	10	8		10	8	7	7	60	
	3. 入浴・整容 更衣	12月	10	5	5			30	90	30		170	↓
		2月	8	3	3			20	90	30		154	
	4. コミュニケ ーション	12月	10	5	5	10		5	8	10		53	↑
		2月	20	10	15	20		8	10	30		113	
	5. 日常生活 自立支援	12月	5	10	5	10		10	10	10		60	↑
		2月	5	20	10	10		13	15	30		103	
	6. 行動上の 問題への対応	12月		5	5							10	↑
		2月		10	10							20	
	7. 食事支援	12月	30	30		30		30			20	140	↑
		2月	30	40		30		40			20	160	
	8. 機能訓練・リハビリ テーション 医療的処置	12月		10				30		10	30	0	↑
		2月		20				30		20	30	100	
	9. その他の 直接介護	12月	10		12			20	12		10	64	↓
		2月	10		10			20	10		10	60	

間接業務	10. 巡回・移動	12月	5	5	5	5		5	5	5	5	40	↓
		2月	5	3	3	3		3	3	3	3	26	
	11. 記録・文書 作成・連絡調整	12月		13	15	5		12	5	5	5	60	↓
		2月		8	12	3		8	3	3	3	40	
	12. 見守り機器 の使用・確認	12月											↑
		2月	3	3	3	3		3	3			18	
	13. ICT・介護ロボット機器 の準備 調整・片付け	12月											↑
		2月	1		1	1		1	1		1	7	
	14. リネン交換 ベットメイク	12月	30			5					5	40	↓
		2月	2			3					3	8	
	15. 居室清掃 片付け	12月	5	5					5		5	20	↑
		2月	8	8					8		10	34	
休憩	16. 休憩・待機 仮眠	12月					60					60	→
		2月					60					60	
その他	17. その他	12月										0	→
		2月										0	
余裕時間	18. 余裕時間（突発でのケ アや対応ができる状態）	12月				10						10	↑
		2月			10	15						25	

# 事業所が導入しているその他機器

アマノ個別入浴リフト、乗り換え装置付きストレッチャー、移乗介助車いす乗助さん、とろみ給茶機、おしぼりハンディ、ほのぼのTALK、キントーンなどを導入。

これらの複数の機器を効果的に使うことで、効率的な業務環境が生まれて今回導入した機器を用いてさらなる効率化の実現に繋がっている。

◆ 現場の業務にフィットする

自分たちで業務アプリが作れる

キントーンは、プログラミングの知識がなくても、ノーコードで業務のシステム化や効率化を実現するアプリが作れるクラウドサービスです。

散在するエクセルや、煩雑なメール、紙の書類の山、バラバラなシステムなど、業務を非効率にしている困りごとを解決できます。



新・デジタルインカム

ほのぼのTALK<sup>++</sup>

話した会話がテキスト化され、聞き漏らしても大丈夫！



おしぼりハンディー

# まとめ

- ① 取組活動を通じて得た気づき、学び、感じたこと  
ICT・介護ロボット導入を現場に受け入れてもらうために、現場の課題を探り、その課題に対して何が必要か検討を重ねてきた。その結果、業務負担の軽減される項目や時間を職員へ打ち出すことが大切である。また、導入前の職員への説明、導入後の評価をすること(PCDAサイクル)が必要だと感じた。
- ② これから取り組む課題  
現在の課題を探り、何が必要なのか、どこを改善していかなければいけないのかを具体的に抽出し検討する。また、今後、職員が不足することを予測し・ICT・介護ロボットを導入することで直接・間接業務の更なる効率化を目指していく。
- ③ 事業所としての今後の方針  
人材不足が懸念されている中でも、ICT・介護ロボットを活用しながら介護の質を高めていき生産性向上の取り組みを推進していき職員の働きやすい環境づくりに努めていきたい。